

清風明火居

原初的な人間の生活に帰する



weekly

7つの住まいの仕掛けをつくり、敷地全体に分散させた。入居者はノマドのように、好きな場所で好きな時間を過ごせるように日替わりプランを提供した。非日常的なアクティビティからインスピレーションが得て、人間の本能的な創造力を引き出してくれるだろう。



岩 狩猟採集民のように冒険し、発見を楽しむ。岩の凹凸を利用して自ら住まいの空間にする。



水 水のゆらめきを眺めて身を任せる。何事にもとらわれない時間。



風 高床にすることで普段感じられない自然の風を受けながら作業ができる。



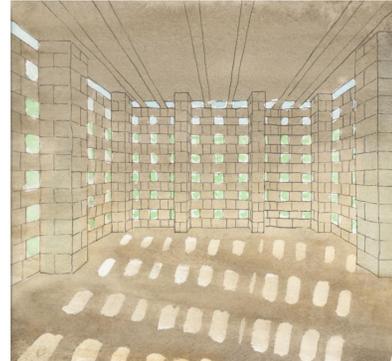
火 火が灯ると自然に人が集まり、コミュニケーションが生まれる。



土 GLから4000mm下げた交流の場。人々はその距離が近くなり、自然に回帰する。



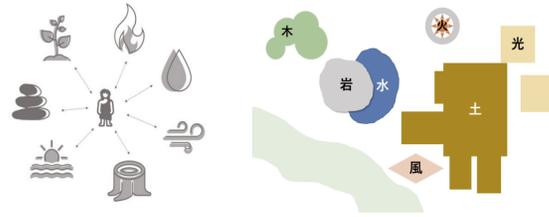
木 好きな場所にハンモックを張って1人の時間を楽しむ。



光 無数の光の粒につつまれる。

本コンペ案では、経済的かつ便利な日常生活の住まいを提供する集合住宅の既存概念から解き放ち、都心に非日常的な住まいを体験させる集合住宅を提案する。

清風明火居は、現代人が狩猟採集民の大自然に住む知恵や身体能力を蘇らせるために、weeklyの意匠として風、水、火、光、木、土、岩の住まいからなる。原初的な生活に帰し、自然と、そして自分自身と心を通わせることによって、集合住宅が現代人の精神的な需求を満たす新しい住まい空間として確立させる。



外部空間としての住まい

木の下に住み、蓮の葉で雨宿りし、人類の原初的な生活は外部空間から始まった。しかし、便利さを追求するため、現代建築は外部空間を排除してきた。コロナ禍で、建築の外部空間が失われたことで、人類が払った代償はあまりにも大きく、外部空間の大切さを思い知らされた。本コンペ案では、一部の使用者に敷地を与えて、7日間限定で林の中で自分の住まいをself-buildさせる。

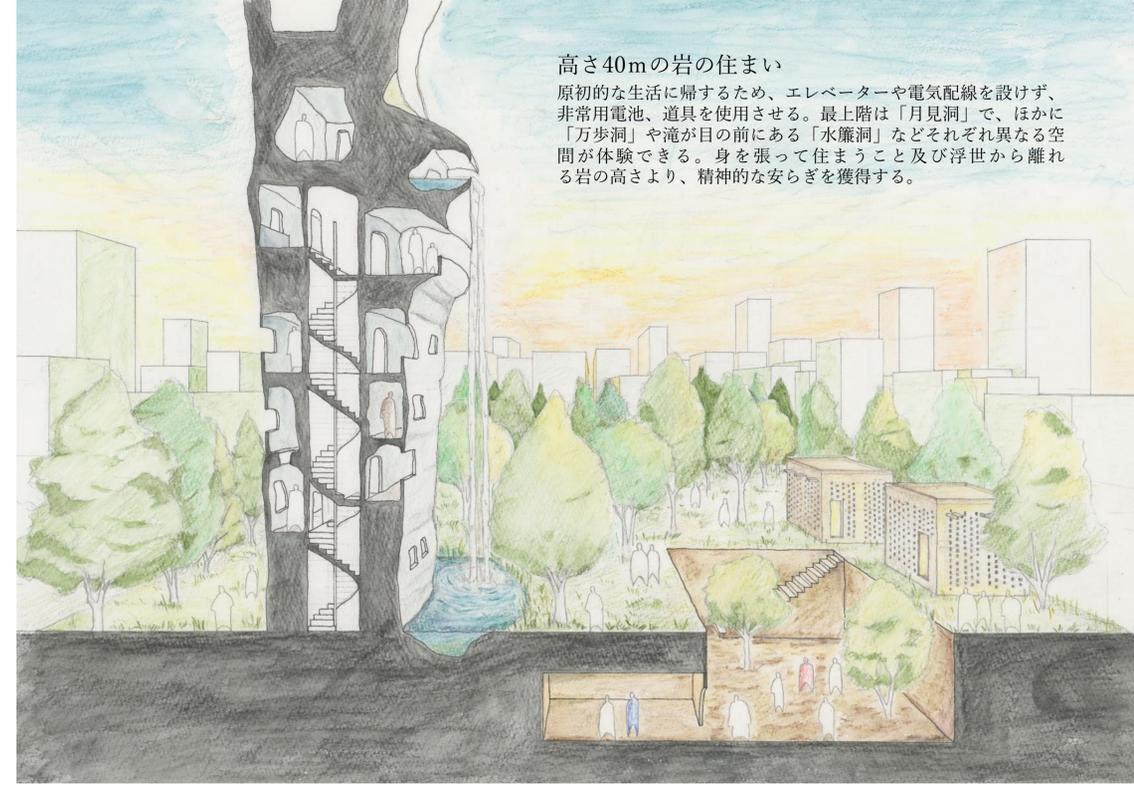


すい 拓地萃

本コンペ案は、天と地に住むコンセプトから、交流の場は大地に置いた。中国の民家ヤオトン（窯洞）から着想した土に囲まれた場所で、冒険談をシェア。

明火の住まい

「住まいの根本は火である。火のまわりに人が集まった時点で住まいの空間は成立する。」（藤森照信）
明火とは、現代文明に頼らない焚火などを指す。炎を囲み、初対面の人々も自然に和んだ雰囲気の中で交流できる。



高さ40mの岩の住まい

原初的な生活に帰するため、エレベーターや電気配線を設けず、非常用電池、道具を使用させる。最上階は「月見洞」で、ほかに「万歩洞」や滝が目の前にある「水簾洞」などそれぞれ異なる空間が体験できる。身を張って住まうこと及び浮世から離れる岩の高さより、精神的な安らぎを獲得する。

